

設立10周年記念フォーラム しあわせな高齢社会の創造

2013年9月28日(土)

梅光学院大学 スタージェスホール



あいさつ
代表 田中隆子



10年間のあゆみ パネル展



講演 「いづれみんなおひとりさま」 講師：上野千鶴子



人口減少社会時代の現在、おひとりさまが家で死ぬと、「孤独死」でしょうか？私は、「在宅一人死のすすめ」ということを言っています。これを可能にするには、24時間巡回訪問介護・看護・医療などの条件が必要です。家で、食事・排泄・入浴ができればよいのです。また、強い本人の意志と少しのお金も必要です。首都圏や地方や過疎地で、今、様々な実践が行われています。

在宅看取りのメリットは、まず本人や家族の満足度が高いことです。終末期の過剰医療を抑制することにもつながります。私は、「トータルヘルスプランナー」という人材の育成が必要だと思っています。トータルライフマネジメント、生き延びるためのシステム作りです。同居家族がいようがいまいが、一人で在宅で死ねる制度への道を進めていきたいと思っています。

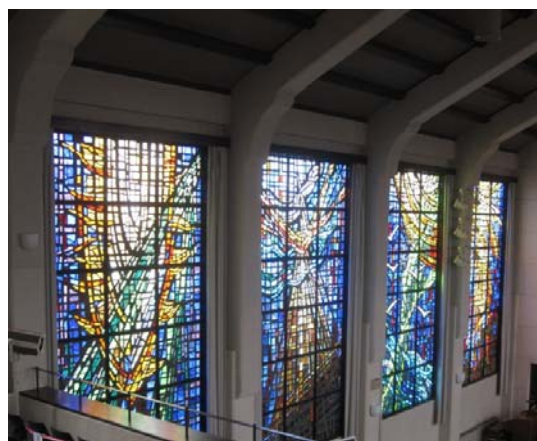


講演 「大介護時代」 講師:樋口恵子



カラスが鳴かない日はあっても、「介護」ということばを聞かない日はない。その介護の時代に「大」を付けなければならないのは、第一に長寿化の進展、第二に介護を支えてきた家族の急激な変容である。少子化非婚化は、下の世代の数を減少させる。高齢者の世帯は、今や1におふたりさま老夫婦、2におひとりさま、3に未婚の子と住む高齢者世帯で、介護できる家族は減少の一途をたどる。「大介護時代」は、すべての人が自分の人生のどこかにケアを組み込んでいく時代である。介護を人々と分かち合い、自分自身の仕事と志と人間関係も失わず、「ながら」介護の生き方を定着させたい。

超高齢社会を乗り切るには、社会の多様な分野に、男女とも各々の能力を生かしながら、できるだけ大勢が参画し、費用を分担し合う方向へ社会全体のギアを切り換える必要がある。年金、医療・介護保険の制度などを大切に守り育てながら、地域で支援し合う仕組みをつくればよい。「地域」が大介護時代のキーワードであることは確かである。」



鼎談 「人生100年いくつになっても学ぶ幸せ“幸齢社会”」

樋口 恵子 ・ 富安 兆子 ・ 上野千鶴子



樋口：家族の形が変わり、男性介護者は30%です。嫁が介護するという時代は終わりました。仕事を続けながら介護ができるしくみ、介護離職させない社会をバランスよく作っていかねばならない。

上野：成年後見制度ではなく、暮らし全体に及ぶ、友人や家族、専門家などチームで、オーダーメイドの支え合う制度を進めましょう。「高齢社会をよくする女性の会」、がんばって！

樋口：在宅で一人で住むことは可能になるのでしょうか？やはり様々な壁があるのでは？

上野：夫の親の介護担当するという嫁はもう絶滅種。夫が在宅で死んだあと、妻も在宅で一人で死ねるしくみ、ぜひ可能にしましょう。

富安：人生いくつになっても学ぶ幸せ！なぜ学ぶのか、何を、何のために学ぶのか？

上野：学ぶこと自体が楽しい、ハッピーということです。学問は「私利私欲」でいい。それが社会の役にたつという信念がある。命と健康を守るためにも自分のためにも学び、豊かな幸齢社会を作っていきます。

